

Title	ロシア史の時代区分に関する一試案(一): 七世紀後半より一七世紀初頭まで
Sub Title	On the chronological division of Russian history from the beginning to the seventeenth century
Author	中澤, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1951
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.24, No.11 (1951. 11) ,p.18- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19511125-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロシア史の時代區分に關する一試案 (一)

——七世紀後半より一七世紀初頭まで——

中澤精次郎

はしがき

第一章 キーエフ・ルーシ

第二章 スタダリ・ルーシ (以上本號)

第三章 モスクワ・ルーシ

おしまひ

はしがき

スラヴ社會 (Славянское общество) の發展は、植民地的な特色をそなへてゐる (註1)。スラヴ人 (Славяне) は、現在のウォルイン (Волынь)、『ポドール (Подол) 及び東ガリシヤ (Восточны Галиции) の地方に居住してゐたが (註2)、七世紀後半、ロシア平原 (Русская равнина) に移動して、『ドニエプル河中流地方 (Средневожжский край) を占據した。その後フィンランド半島 (Финский залив)、『ラドガ湖 (Ладожское озеро) の方面に進出して、ヴォルガ河上流地方 (Вернее Поволжье) に植民した。この植民に四、五百年が費やされてゐるが、更らに約五百年後の一六世紀以後、スラヴの植民者は、ウラル山脈 (Уральские горы) を越えて東進してゐる (註3)。そして、この十世紀餘にわた

る植民の過程、スラヴ社會の發展過程に、國家形態の發展が見出されるのである。

本稿はこのような國家形態の發展を跡づけるのであるが、國家形態への考察にあつて、次の點が注意されねばならないであろう。すなわち、國家形態乃至支配權力形態の變化が、前述の植民運動の主體をなす直接の耕作者、生産者である農民から餘剰生産物を、收取するその仕方、收取形態の變化に對應して現われていることである。言うまでもなく、收取形態は段階によつて異なる。しかし收取關係を基礎づけるものは、經濟外的強制であつて、國家形態は、この經濟外的強制の政治的集約的表現に外ならぬからである。

本稿は、スラヴ人のロシヤ平原移住後の十世紀に現われた、收取關係乃至收取形態の發展に對應する國家形態の發展を基礎として、その間の時代區分を試みようとするものである。

(註一) プラトノフは、ロシヤ史の過程に「我々は最初ヨーロッパ人の勤勉な力強きスラヴ人の植民を見出す」(S. F. Platonov, *History of Russia*, translated by E. Aronberg (История по Русскому источнику), 1928, p. 15)と稱してその「Eastward Movement」の重要點を「マスコカ合衆國史」の「Westward Movement」に對應する「(G. T. Robinson, *Rural Russia under the old régime*, 1932, p. 8)との言えり。

(註二) スラヴ人の原住地については諸々な説がある。これを大別すると、スラヴ人の原住地をこの平原に求める説と、この平原に移住したとみる説とである。前者は舊説であるが、現在一部ではこれを有力視しているようである。本稿は後者すなわち通説に従う。通説に屬する主なものは

B. Ключевский, *Курс русской истории*. 1937, ч. 1, стр. 104—107. ; M. H. Pokrovsky, translated by D. S. Mirsky *Brief History of Russia* (Русская история), Vol. 1, pp 38—39. ; S. Platonov, op. cit. pp. 13—14. ; G. Robinson, op. cit. p. 8. ; Bernard Pares, *A History of Russia*, 1928, pp. 11—13. ; Maxime Kovalevsky, *Russian Political Institutions*, 1902, p. 6.

前者の所説は一九世紀の研究に多し。カラタムン(Карачини), *チミン(Тюголин), *コトヤハン(Соловьен), *ウツヤハン(Белнев)等の諸説を參照す(B. Ключевский, Указ. соч. ч. 1, стр. 96—98.)

尙 W. R. Morfill (Russia) 及び Alfred Rambaud (The History of Russia, translated by Leonora R. Lang (Historie de la Russie, 1878)) は『この移住に言及しつゝなす。
(註 6) M. H. Pokrovsky, op. cit. vol. I, pp. 38—39.

一 キーエフ・ルーシ

七世紀末スラヴ人は、ロシア平原の南西よりの一隅、すなわちカルパート山脈 (Карпатские горы) から、ドニエプル中流域に移住し始めたが、この際、その社會組織上に二つの變化が現われている。

まず、軍事組織的意義をもつ部族的連合が解消して、部族の個別的統一が、次第に強固となつた (註 1)。しかし、部族相互の交通は、必ずしも断たれてはいない。彼等は共通の言語・信仰・慣習の紐帶によつて結ばれ、客人歡迎 (Gastfreund-schaft) を、神聖な義務と考へていたようである (註 2)。

次に、部族内部の基礎的統一體、すなわち氏族が漸次崩壊し、これに代つて、新らしい社會的經濟的發展の單位であるドゥヴオリシチエ (Двуоришче) あるいはペーチシチエ (печиче) (註 3) が現われた。家長權は、氏族長權に代つて増大し、土地は、原始的占有乃至占奪の事實に基いて、ドゥヴオリシチエに所屬するものと考へられ始めてゐる (註 4)。森林と沼地に富む移住地 (註 5) の經濟生活 (註 6) にとつて、氏族の包括的土地占有、血縁的集團生活は障礙となつたのである。移住地の自然的環境は、社會組織上の變化特に大家族制發生の契機となつてゐるが、同時に、この平原のそなえていた社會的環境が無視されてはならない。後に明らかにするが、この社會的環境は、スラヴ社會の發展を條件づけてゐるのである。

スラヴ移住者のドゥヴオリシチエは、それぞれガラデイシチエ (родиче)——一種の保邑——をつくつた。これらのガラデイシチエが、四露里から八露里 (註 7) の距離を置いて散在したドニエプル流域、ロシア平原には、相當古くから商業

文明が存在していた(註8)。すなわち、この國土の發達した諸河川、ヴォルガ、ドニエプル、ドニエストル(Днепр)の水系は、アラビヤ、ビザンチン、ギリシヤとヨーロッパを結ぶアラビヤ、ギリシヤ、ザロズヌイ(Зарозный)、ソロスイ(Solonski)の諸貿易路(註9)を形成しており、商業民族特にホザール人(Хазары)が、スラヴ移住前後この平原に現われていたのである(註10)。彼等は、ヴォルガ河口に、首都イチーリ(Ичли)を建設した。そこに多數の回教徒キリスト教徒及び異教徒が集つた。それはヨーロッパとアジアを結ぶ世界的市場であり、その最盛期は八世紀であつた。

ロシア平原に移住したスラヴ人は、東西の商業的仲介者、ホザール人とまず接觸した。その後スラヴ人は、バルチック海(Балтийское море)とビザンチン・ギリシヤを結ぶ貿易路——年代記には「ヴァリヤグよりギリシヤへの道(Путь из Варяг в Греки)」(註11)と記される——を、南下したヴァリヤグ人(Варяги)と密接な關係をもつた。

商業的な社會的環境、特にホザール人との接觸は、まずバゴスト(Погост)——原始的市場(註12)——の發展に現われた。すなわち移住地の商業文明、商業的企業心は、移住社會の自生的なバゴストの内に、非農村共同體要素である商人、及び戰士を鑄出してきたのである。このようにして、世界貿易の一環に結びついたバゴストのあるものは、益々有利な商業的軍事的條件をそなえ、部族的限界をこえた地域的な商業都市に發展した。キーエフ(Киев)、チェルニゴフ(Чернигов)、スモレンスク(Смоленск)、ノーヴゴロド(Новгород)等、「ヴァリヤグよりギリシヤへの道」に沿つた諸都市が現われた。しかしこれら諸都市發達の過程に、前述のヴァリヤグ人(註13)が、北ドウィナ河(Северная Двина)、及び白海(Белое море)、少し遅れてバルチック海方面から、すでにこの國土に現われていた(註14)。

彼等ヴァリヤグ人は商人であつた。しかし、平和的な商人ではなから。イヴン・フォドラン(Ион Фодлан)(註15)の見聞記は、彼等を「劍・小刀及び手斧を手離さずに所持した」商人とえがいている(註16)。すなわち彼等とスラヴ人との經濟的接觸は、所謂交易ではなかつた。彼等はスラヴ人を襲撃し略奪し、あるいは征服し貢納を課した。かくすることによつ

て、ヴァリヤークの武裝商人は、この國土で商品を獲得し、ドニエプル水系を利用してビザンチン貿易に参加したのである。従つて既述の商業都市の急速な發達、八・九世紀に全盛を極めたアラビヤの商業時代に呼應して、九世紀以降輸送的仲繼的な貿易としてではなく、ビザンチンとの獨立的な貿易として、獨立的な意義を都市が獲得していることは、ヴァリヤーク武裝商人の出現と關連づけて考えられるべきではなからうか。元來、當時の斯拉ヴ社會は極めて低度の經濟的發展段階にあつた(註17)。従つてここに商業資本の自生的に發生する餘地はない。にもかかわらず、九世紀以降商業都市が急速に發達したのは、この國土の社會的環境、商業的企業心に呼び起されて發生した、土着の萌芽的な原始的商業資本——兵商階級(註18)が、なんらかの契機ある外部的要素により急速に蓄積されたからである。この契機をなすものがヴァリヤークの出現であり、ヴァリヤークの斯拉ヴ征服こそ、商業都市發達の契機となつていると考えられるのである。従つて、さきに商業都市の急速な發達を述べたが、それは斯拉ヴ的商業都市ではなく、非斯拉ヴ的と規定しなければならぬであらう。更らにこの點をやや詳しく論じてみよう。

ヴァリヤーク人の斯拉ヴ征服は、ヴァリヤークのクニヤージ(Князь)——侯(註19)——により個別的になされた。すなわち個々のクニヤージが、都市の支配権力者となつたのである(註20)。しかし、八六二年リュリック(Рюрик)を首領とする一團のヴァリヤーク兵商人が、ノヴロドを征服(註21)し、ついで斯拉ヴの全部族的な征服に成功した。そしてこの征服後に、征服者のヴァリヤーク人と、被征服者の斯拉ヴ兵商階級との急速な融合が行われるに至つた(註22)。それではなに故に兩者の融合が生じたのであるか。それは、武裝商人的乃至強盜商人的(註23)なヴァリヤークの征服者が、自己と近似的な社會的經濟的要素を、都市の斯拉ヴ人の内に見出し得たからである。従つてこの事實は、都市の斯拉ヴ商人が強盜商人として、ヴァリヤーク征服以前、すでに斯拉ヴ移住社會の内に見われていたことを示している。九世紀以降の都市の急速な發達、既述の表現を繰返えすと、仲繼的な役割から、ビザンチンとの獨立的貿易への都市商業の發達は、ヴァリヤークによ

る征服を契機としてゐるのである。つぎに、都市商人の性格、すなわち非スラヴの性格に關連して、そこに見出される支配關係に言及してみる。

異民族の征服は、一般に確然とした支配隸屬關係を生み出す。しかし、既述の都市商人の考察は、ヴァリヤグ人のスラヴ人に對する支配が、必ずしも征服に基くものでないことを明らかにしよう。後述するが、本質的には征服以前にそれが存在してゐたのである。それは、異民族の征服と言う姿で、スラヴの都市兵商階級と、スメルチ (Смерди) (註24)——農民階級との既存の支配關係を、より明確化普遍化して現われたのである。

しかし、問題は支配關係の明確化乃至普遍化が、なにを意味してゐるかにある。それは、貢納 (註25) と言う形態で現われている収取の普遍化であつた。換言すると、貢納的収取關係が、スラヴ移住社會に貫徹していつたのである。すなわち、兵商的支配階級の収取——むしろ收奪であるが——する貢納がより豊富になり、従つてより豊富な商品が、兵商的支配階級に提供されたことを意味する。

要するに、スラヴ全部族の上に確立したヴァリヤグの征服者的支配權力は、その階級的基礎を、その征服を契機として、成長した兵商階級に置いたのである。又都市商業は、當時のスラヴ人の社會的經濟的生活から、遊離する外部的現象であつた。しかも兵商階級が人種の構成上、非スラヴ的色彩の強いことに注目すると、キーエフ・ルーシ (Київская Русь) (註26) の支配權力——商業資本——は、この國土の上空に寄生した外來的なものと表現されよう。

以上、キーエフ・ルーシの支配關係、すなわち、収取關係及び支配權力の階級的基礎を略述したが、それでは、貢納的な収取形態が、支配權力形態をどのように規定したか。すなわち貢納的収取のこの時代に、どのような國家形態が見出されようか。

すでに、キーエフ・ルーシ支配權力の階級的基礎が、兵商階級であると述べた。しかし都市商人は、客觀的にみると明らか。

かに一つの階級を形成しているが、主體的に階級をなしてはいない。都市商人は、クニヤージがそのドルジーナ(Дружина)——親兵隊——と共に、行動して徴収する貢納に、あるいは又、外征によつて獲得する奴隸(註27)に、商品の源泉を求めた。すなわち彼等の經濟的基礎は、貢納的收取及び收奪にあつた。従つて、彼等はある地域の限界、すなわち都市にとじこもり、その支配権力者クニヤージと益々緊密に結合した。かくすることによつて、より多くの商業的利得が、都市商人に約束づけられたのである。すなわち支配権力は、都市商人と直接に結びつくクニヤージ的権力として、現われている。

支配権力が諸都市に、換言すると地域的に分散する以上、支配権力形態は明らかに分權的である。すなわち、キーエフ・ルーシの貢納的收取形態は、その國家形態を分權的に規制しているのである。

しかしキーエフ・ルーシの都市の商業活動は、海外市場でいとなまれた。都市商人は隊商を編成し、商品を安全に市場まで輸送しなければならぬ(註28)。従つて貿易路の保全は、都市商業にとつて重大な問題であつた。幾つかの獨立的なクニヤージ権力の對峙は、好ましいものではない。

この觀點からのみ考へるならば、都市商業は、集權的國家形態を要請するはずである。ここに、キーエフ・ルーシの國家形態は、矛盾する二つの性格を、同時にもたねばならない。しかし、分權的國家形態は商品獲得の必然的規制であるが、集權化の要求は、商品交換上に生れてくるものである。それは、必ずしも都市商業自體の否定となり得ない。勿論、兵商的支配階級が、その寄生的性格を破棄するにつれて、すなわち收奪的收取の解消に應じて(註29)、集權的傾向が現われた。しかしその極めて萌芽的段階で、キーエフ・ルーシの都市商業の發展は終止したのである。

以上の考察は、つぎのように結論づけられよう。キーエフ・ルーシの國家形態は、兵商的分權的國家形態である。

既述したが、「クニヤージの主要な政治活動」(註30)は、貢納の徴收であるが、他に重要な對外的な政治活動があつた。それは海外市場の獲得、これら市場に通ずる貿易路の確保である。コンスタンチノープリ(Константинополь)への軍事

的遠征は、その活動の顯著な現われである。すなわち、八六五年（あるいは八六〇年とも言う）にアスコリド（Аскольд）、九〇七年にオレーグ（Олег）、九四一年及び九四四年にイユーリ（Игорь）が、それぞれコンスタンチノープリに遠征した。更らに、スヴァトスラフ（Святослав）が九七一年に、ヤロスラフ（Ярослав）が一〇四三年に遠征をしている。アスコリドのコンスタンチノープリ攻撃は、ルーシの商人が殺害され、しかもこの賠償をビザンチンが拒否し、ルーシとの條約を破棄したために起されたのである。又ヤロスラフの征服もコンスタンチノープリで、一人の商人が殺害されたためであつた。従つてこれらの遠征は、ほとんど通商條約をもつて終結している。

オレーグもまた、全商業都市的政策である遠征の後に、通商條約を締結している。しかもこの條約で、キーエフのクニャージ・オレーグは、始めてヴェリィキイ・クニャージ（Великий князь）——大侯——の稱號を使用した。軍事的經濟的に「ルスの町々の母」（матр Русских городов）（註31）であるキーエフは、當然全ルスの對外活動の中心であつた。しかし、この條約には、多數のクニャージの署名が見出される（註32）。すなわち、大侯の稱號は、直ちに統一的支配權力の存在を意味するものではない。キーエフを中心とする全商業都市的政策の遂行にも、都市商業の存立基礎をなす貢獻的收取は、支配權力の分化を主張していたのである。従つて長上權——大侯の地位の獲得に、隱蔽された（註33）クニャージ相互の抗争は、ウラヂミール（Владимир 972—1015）のキリスト教攝取によつて、解消し得るようなものではなかつた。年代記は、尙、抗争に關する豊富な記述を續けてゐる。

キーエフ・ルーシ都市商業の恣意的な收取は、スメルヂの貧困、東北方への逃避従つて商品の源泉枯渇を促進したが、一世紀以降都市は、遊牧民ポロビッツ人（Половцы）の侵攻を、屢々蒙つた（註34）。しかも一三世紀以降には、十字軍遠征に歸因する貿易路の變化が生じ、都市商業は大きな打撃を受けた（註35）。まもなくポロビッツ人に代りタタール人（Татары）が現われ、衰退したキーエフを中心とする諸都市の根底を破壊した（註36）。

この都市商業の繁榮及び没落に並行して、都市の誅求、遊牧民の侵攻から逃避した農民の植民が、ロストフ・スズダリの地方 (Ростовско-Суздальский край) に進められてゐる。

ヴォルガ、オカ河 (Ока) の夾角地からなる、ロストフ・スズダリの地方は、南方遊牧民の直接的危険から地理的に離れ、又森林によつて防禦されていた。しかも、商業活動の世界的中心地點、及び通路との直接交渉から程よく離れていた。それは、封鎖的自然經濟の成熟する適當な環境であつた。この地方に、貢納的收取形態とは異なる收取形態すなわち、國家形態の發展が現われてきたのであつた。

(註1) カルバート山脈時代、スラヴ人は、ドレヴリヤン人 (Древляны) —— スラヴの一部族 —— の部族長を中心として、部族連合を形成した。東ローマ帝國との不斷の抗争が、このような軍事的連合を生み出したのである。しかし、アバル人 (Авары) —— あるいは Obry (S. F. Platonov, op. cit. p. 7) —— の攻撃を受けて、この連合は解體した。ロシア平原への移住は、解消したままに行われ、B. Крючевский, Указ. соч. ч. I, стр. 102—103。尙、同じような部族が、移住地に現われている。すなわち、ポリヤン人 (Поляны), エンタリヤン人 (Ентаряны), ウォルイニヤン人 (Волыны), セウエリヤン人 (Северяны), ラヂミチ人 (Раимичи), ウヤチチ人 (Уятичи), タリウイチ人 (Кривичи), ポロチヤン人 (Полоцки), ドレフウイチ人 (Древляны), ノヴェホロド・スラヴ人 Главные Новгородские племена (B. Крючевский, Там. же. ч. I, стр. 109—110)。

(註2) T. H. Pantenins, Geschichte Russlands, 1917, S. 4

(註3) Дворные は、'двор' —— 屋敷の指大、又、'печные' は、'печь' —— 暖爐の指大である。西南ロシアのドゥヴウオリシチ、北ロシアのノーチニシは、いずれも大家族制の存在を意味している。家族構成員は一般に血縁的關係者であるが、時には非血縁者を構成員—— 働き手に加えている。他にザドルーガ (Задруга) —— 大家族、クッチャ (Куча) —— 群、アチシチヤ (очина) —— 大きな火、等の名稱がある (ボタロフスキ著、深見尙行譯、ロシア文化史概論、五一—五三頁、Bernard Pares, op. cit. p. 13. : M. H. Иокровский H. M. Иокровский и B. H. Сроповкер, Русская история. 1913, стр. 55—56.)

(註4) リヤシチエニコ著、東健太郎譯、ロシア經濟史、上卷、四五—四六頁。

(註5) 「……しかして、町 (キーエフ) のあたりには、森と大いなる松柏林があり、そこで獸を捕えていた」(除村吉太郎譯、ロシア年代記、八頁)。キーエフを中心とする、ドニエプル河流域は、當時森林に蔽われ、氣候は今日より遙かに濕潤であつたようである。す

なわち、ロシア平原の森林地帯が、現在の南方ステップ地帯に入りこんでいた(ボタロフスキイ、前掲書、五五頁)。スラヴの植民はこの森林地帯と草原地帯の境界に沿って、北方のオカ及びヴォルガ河上流地方に進んだ。草原地帯に現われた勇猛な遊牧民、マチュエーグ人(Меченги)・ボロウツマン(Борюцман) (Порюцка)・タートル人(Таргарь)の危険を避けたためである(リヤシチェニコフ、前掲書、二六一—二七頁、S. Platonov, op. cit. p. 7.)。

(註9) 農業は極めて原始的段階にあつた。草原地帯は休耕式、森林地帯は火田式耕作が行われた。農具は、一般に簡単な木製のソナー(соха)——鋤——が、その後、重く比較的完備した開墾地用のラーロ(пало)——犁——が使用され始めた。畜力の利用は現われてゐない。それは一〇世紀特に一一世紀以降(三七頁、註2参照)の、しかも支配階級に限られたようである(ボタロフスキイ、前掲書、三九—四七頁)。草原地帯の農業に對して、森林地帯では狩獵が優越してゐる。狩獵特に獸獵は、養蜂と共に貢納(二九頁、註25参照)の主要な部分をなしてゐる。例えば、ロシア年代記一七、四九頁。リヤシチェニコフ、前掲書、三四—三九頁。

(註10) 露里(берца)の一ウヰルメタは三分の二哩、約一・〇七坪(Alfred Rambaud, op. cit. vol. II, p. 293, TABLE OF MEASURES, WEIGHTS, & C.)。

(註11) 紀元前五世紀頃(ロムタス時代)既に、ギリシヤ植民地が、黒海(Черное море)の北岸にありた。なわち、ブツ河(Буц)河口のオリウヤ(Ольбия) (Olbia) 現在のオキヌトキーリヤ市(Сенатороль)及びケルチ市(Керчь)附近の(タマンネス Херсонес (Chersonesus) 及びタマンタマヤ(Таманская) Пантифея)のタマン半島(Таманский полуостров)の(フナトフツク Фанатория (Phanagoria) 及びイオン(Ион) 河口のタナイヌ(Tanais) 及び(В. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 119.)。これらの植民地は、内陸の Scythian——スラツ移住以前の居住者——と交易してゐる。彼等の穀物・魚類と、ギリシヤの織物・酒・油等が交易された(S. F. Platonov, op. cit. p. 3. : B. Parus, op. cit. p. 8.)。

(註12) アラビヤ貿易路は、アラビヤを出發してカスピ海(Каспийское море)のヴォルガ河を經つ、連水陸路によりラドガ湖(Ладожское озеро)に向つ、バルチック海を經つ、ユートラランド島に達するものである。これはロシア平原を横斷する最古の貿易路であつた。尙アラビヤ貿易路には、ドヴォノ河口のビアルミヤに終るものもあつた(リヤシチェニコフ、前掲書、五八頁)。ギリシヤ貿易路は(二八頁、註11参照)に指摘する。ザローズモイ貿易路は、北歐からエウロメヌス河(Дуэстр)に沿つて、ドニエーフ河口に達するもの。シロモイ貿易路は、北歐から陸路、ドニエ河を經つ、アゾフ海(Азовское море)に出づ、そこからギリシヤ、ビザンチンあるいはアラビヤに向つ貿易路である(リヤシチェニコフ、同書、五九頁。S. Platonov, op. cit., p. 14.)。

(註13) ホザール人は、トルコ系の遊牧民であつたが、南方からカスピ海を迂回し、ヴォルガ河下流の草原地帯に現われた時に、その遊

牧性を失つてゐる。彼等は、農耕と商業をいとなみ始めた。八世紀中頃、彼等はイチーリを建設した。その王國はヴォルガ、ドニエプル河の間に擴大し、南はコーカサス (Kaukas) に及んでゐる。ギリシヤの諸植民地も一時、この王國の組成に入つた。又、エダヤ教が國教となりエダヤ語が國語となつてゐる。特に、この王國はギリシヤ・ビザンチンと密接な關係をもち、Constantine V, Copronymus (七六一—七七五) と婚姻關係を結び、彼の子 Leo IV はホザール人であつたと傳えられる (B. Pares, op. cit. pp. 14-15.)。しかし九世紀以降、南方のベチエネーグ人、ポロビッツ人の進攻にあつて、この王國は急速に没落した。移住スラヴ人にとつて、彼等は比較的平和的な隣人であつた。彼等を通じてスラヴ人は、東方への貿易路を開拓してゐる (年代記、一七頁。リヤシチェンコ、前掲書 二八一—二九頁。S. Platonov, op. cit. p. 7, II. : B. Pares, op. cit. pp. 14-15.)。

(註11) 『ギリヤーン族 (スラヴ部族) が別々に、これらの山々に住んでゐた時、『ヴァリヤグからギリシヤへの道』があつた。ギリシヤ人の所からドニエプル河に沿ひ、ドニエプル河の上流からは地上に舟を曳いてロヴアチ河に達し、ロヴアチ河から大いなるイリメニ湖に入る。この湖からヴォルホフ河が流れ出して、大いなるネヴォ湖 (ラトガ湖) に注ぎ、この湖の河口がヴァリヤグ海 (バルチック海) に通じ、この海に沿うてローマにまで至り、またローマから同じ海に沿つてツアリグラード (コンスタンチノーブル) に行きツアリグラードからポント海 (黒海) に来ることが出来たのであり、この海(ドニエプル河は注ぐ) のである。……」(年代記、五一—六頁)。

(註12) バユストとは、ユスチス (Юстица) — 交易する場所、すなわち自然發生的な原始的市場である (リヤシチェンコ、前掲書、四九—一〇頁、James Mayor, An Economic History of Russia, 1914, vol. I, p. 13. : B. Krivonozhki, Указ. соч. ч. I, стр. 123.)。しかし、これを貢納乃至租税と結びつけた場所、すなわち貢納納入所とみるものもある (ロシア年代記、六八一—六八二頁。註一五七参照)。

(註13) スカンディネーヴィヤ半島から、この國土に現われた Northmen を指しよる (S. Platonov, op. cit. p. 12.)。すなわち非スラヴ人種 of Swedes, Norwegians, Goths, 及び Angles が、ヴァリヤン人と呼ばれた (J. Mayor, vol. I, p. 15.)。この言葉はスカンディネーヴィヤ語の vaering あるいは varing — 共に意味不明 — の派生語とみるものもあるが、взприкири — 動詞、旅商する — の名詞 паночник の同意義語とみられる (B. Krivonozhki, Указ. соч. ч. I, стр. 127—129.)。

(註14) ホクロノスキイ、前掲書、五七一—五八頁。S. Platonov, op. cit. p. 12.

(註15) あるいは、Ibn Tozlan と言ふ (M. Kovalevsky, op. cit. p. 12.)。一〇世紀初頭のメラビヤ人、スラヴ社會に關する貴重なる見聞記を残してゐる。

(註16) リヤシチェンコン、前掲書、六〇頁。

(註17) 二七頁、註6参照。

(註18) M. Kovalevsky. op. cit. p. 12.

(註19) князь はスカンディネーヴィヤ語の kónings スラヴ語への轉化である (B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 134)。この語は英語の king に相當し、又その地位はローマ帝國の Dux に相似する (I. Mavor, vol. I, op. cit. p. 16)。又、屢々同様の意味をもつウイチヤス (Вичас) も、スカンディネーヴィヤ語の viking の轉化である (M. Pokrovsky, op. cit. vol. I, pp. 42-43)。

(註20) キーエフは、リューリック出現以前に、ヴァリヤグのアムコリ (Амори) 及びキール (Кир) の支配下に置かれた (ロマヤ年代記、一九頁)。當時、貿易路及び都市自體が遊牧民、チエネーク人のために脅かされていた。このことが、キーエフの場合、最初は傭兵的なヴァリヤグのクニャーシを、容易に都市権力者に轉化させた一因ともなつた (I. Mavor, op. cit. vol. I, p. 16)。アムコリド及びヂールのキーエフ征服は、ロシヤ年代記紀元六三七〇年——すなわち西曆八六二年である。この頃には諸都市に多數のヴァリヤグ人が現われている (B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 126)。

(註21) 年代記は、この事實をつぎのように語っている。「そこで自ら互の間で決めた『我等を領し、掟に従つて裁くような侯を探そらではないか』と。しかして海の彼方のヴァリヤグ人のもと(……)。ルーシに向つてチエーヂ、スロヴェン、クリヴィチ及びヴェーシ (スラヴ諸部族) は言つた、『我等の地は廣大であり、豊かであるが、その中には秩序がない。來つて君臨し、我等を領せよ』と。……』しかし、これは支配権力者の迎立ではなす。この物語は、年代記者の扮飾である (B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 135-136)。

(註22) ヴァリヤグの征服以前、都市は、その政治機關としてヴェチエ (вече)——民會——をもつていた。ヴァリヤグのクニャーシは、ヴェチエの政治權力を、その手中に收めたのであるが、この過程にヴァリヤグの特に下層部と都市兵階級との融合が認められる (A. Rambaud, op. cit. vol. I, p. 46)。しかし、上層部は、一〇—一世紀頃まで、外來的性質をもつてつた。例えば、九四五年のイェーリ條約の署名には、スラヴ名の使節、商人を見出せなす (B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 164, リヤシチェンコ前掲書、五三五—五五頁)。

(註23) ポクロフスキイ、前掲書、五七頁。

(註24) 一般農民の呼稱、スメルドとは、惡臭を放つ者の意である (ロシヤ年代記、一三二頁)。

(註25) ダーニ (Дани) とは、この時代の收取を特色づけるものである。すなわち、ダーニは、原則として農民に課せられた。都市

は軍事的償金の場合のみ、この種の賦課を受けた。ダーニの内容は、主として獸皮、蜂蜜、蜂蠟あるいは銀等である。いずれもギリシヤ、ビザンチンに輸出する重要な商品となつてゐる。冬の間、クニヤージは、ドルジーナを率ゐる巡回 (nomade) して、ダーニを徵收した。そして夏に、これを海外市場に輸送した (三〇頁、註23参照)。尙、ダーニを納めないが、あるいは不十分な場合は、レヂエニイ (recheyi)——怒情者——と呼ぶ一隊が派遣された。彼等は、ボダンヌエ (nodanue)——上納者——の負擔で衣食することにより、すなわち、レチアチイ (rechati)——怒ることによつて、その上納を強制した (ボクロフスキイ、前掲書、二一四頁。B. Kroyechkii, Ykaz. sov. 4. 1. 1. 150—151)。

(註26) Kireckan はキーエフの形容詞。ルーシはラシーヤ (Rusia) の古名である。尙、ルーシの語原は明らかでないが、フィン人は現在も、スウェーデン人を Rootzi と呼ぶ (A. Rambaud, op. cit. vol. I, p. 45)。従つて、ルーシは古代スウェーデン語の rothar——槎で漕ぐ、航海する——から出たものと考えられ得る (ボクロフスキイ、前掲書、五八頁)。ルーシは最初種族的意味に用いられた (B. Kroyechkii, Ykaz. sov. 4. 1. 1. 165—166)。すなわちスカンディナヴィヤ半島から現われたヴァリヤグ人に、與えられたのであるが、その多くは、スラヴ人が包含された。同時に、スラヴ人の居住地、ロシア平原を意味するようになった (S. Platonov, op. cit. pp. 22—23)。

(註27) 奴隸が最も高價な商品であること、ルーシの多數の奴隸商人が、海外市場に参加したことについて、數多くの記録が残されてゐる。奴隸獲得の手段が、掠奪あるいは戦争であることも述べるまでもない (ボクロフスキイ、前掲書、六〇頁。リヤシチェンコ、前掲書、六三—六五頁。ロシア年代記、四二、四七、四九頁)。

(註28) 四・五十人の漕手が必要とする、數噸積の丸木舟 (舟) に、冬に徵收した貢納を積みこむ。この舟に、クニヤージ及びドルヂーナ又モステイ (roch)——大商人の舟が加つて、隊商が編成される。春から夏にかけて、この隊商はドニエプル河を下り、ツアリグラード (Hlypergrad) に現われた (S. Platonov, op. cit. p. 30. : B. Kroyechkii, Ykaz. sov. 4. 2. 1. 151—152)。

(註29) 奴隸制的收取への移行である。

(註30) Raymond Beazley, Nevill Forbes and G. A. Birkett, Russia, 1918, p. 9.

(註31) B. Kroyechkii, Ykaz. sov. 4. 1. 1. 186. オランダは、リョリックのクニエリ (Krop) を補佐して、八八二年キーエフに遠征した。彼は、キーエフのクニヤージ・ナスコリド及びザールを撃破して、ここに「君臨し、かく言つた、『この町をしてルーシの町々の母たらしめよ』と」(ロシア年代記、二二—二三頁)。

(註32) ボクロフスキイ、前掲書、二八七頁。

(註 32) ボタロフスキイ、同書、六〇頁。

(註 34) ロシヤ年代記、一二二一、一二六、一二八一—一二九、一六四、一六五—一七八頁。

(註 35) M. Pokrovsky, op. cit. vol. I, pp. 46—47. ; M. Pokrovskii, Указ. соч. стр. 135.

(註 36) タタールがキーエフを蹂躪した一二四〇年(ロシヤ年代記、五六九—五七〇頁)後、まもなく一二四六年、ここを通過した傳導師
フラン・カルベニ(Фран-Карпини)は散逸した多数の殘骸のみを、キーエフの跡に見出し得たに過ぎなかつたと言ふ(J. Mayor, op.
cit. vol. I, p. 21.)。この壊滅からやや恢復しかけた一二九九年、キーエフは再びタタールの襲撃を受けつゝる(B. Ключевский, Указ.
соч. ч. I, стр. 293.)。

ニ スズダリ・ルーシ

一一世紀以前には、土地關係の明確な形式が現われていない(註 1)。前章で指摘したが、土地の占有は、原始的占奪に基
くものであつた。スラヴ農民は、斧と鋤の行くところに従ひ、その原始的農耕を續けたのである。又、兵商的支配階級は、
未だ土地の私經濟の利用を考へていない。彼等は、その社會經濟的基盤を、貢納に求めたのである。

しかし、貢納それ自體は、土地の私經濟の利用の可能性を内包している。しかもこの可能性を備へるものは、述べるまで
もなく、兵商的支配階級——商品奴隷所有者であつた。この可能性の實現、すなわち、商品奴隷(чужды)の勞働奴隷
(Холопы)への轉化、奴隷主的經濟の發生が、キーエフ・ルーシの末期に見出される。しかも又、これは土地所有觀念の發
生、世襲的大土地所有者の出現でもあつた。

すなわち、土地所有觀念は、「これは私の土地である。なに故ならば、これを耕す者が私の所有であるから」Эта земля
моя, потому что мои люди(註 3)と言ふ、辯證法的過程を経て、發生しているのである。そして、この土地所有觀念
の發生、換言すると奴隷主的經濟の發生は、その發生以後の收取形態を論ずる上に、大きく注目されなければならない。後

述するが、スズグリ・ルーシの收取形態を特色づけるものは、勞働奴隸所有、土地所有に外ならないからである。

一世紀以降、支配階級は、奴隸主的農業經營者、大世襲地所有者として、古代的共同體的農民層の内に現われた。このようにして、彼等は、その外部的寄生的な性格を排除し、自らをスラヴ化してきた。しかし、すべての土地が急速に世襲地化されてはいない。極めて廣範な共同體的土地——後述の黒土が存在した。すなわち、古代的遺制である共同體的土地關係は、尙壓倒的であつた(註4)。従つて、クニヤージ、バヤーリン(Боярин)——貴族(註5)——ゴスチ(Гость)——大商人——及び僧侶の大土地所有者以外に、小土地所有と言ふものが現われていない。

しかし、奴隸主的經濟の發生、世襲的大土地所有の發生——兩者は時間的に一致する。従つて今後は、土地所有の發生とのみ述べる——は、新しい收取關係乃至形態を生み出した。

第一章で述べたが、キーエフ・ルーシの收取關係は、實力によつて直接的に支えられたが、土地所有發生以降のそれは、所有を媒介とする。すなわち、兵商人と農民との收取關係——支配關係からみれば、征服者と被征服者——は、奴隸主的農業經營者と奴隸との關係に發展してきた。貢納的收取に對して、勞働力の人格的所有を通じその餘剩勞働力を、收取する所謂奴隸制的收取が現われたのである。

すなわち、キーエフ・ルーシの征服者の支配權力は、その外來的寄生的性格を失う——スラヴ化すると同時に、個々の奴隸主的權力、土地所有者的權力に分化した。この點を更らに説明してみよう。

キーエフ・ルーシ、すなわち貢納的收取の時代、ドルジナー——バヤーリンの前身——は、クニヤージの實力的基礎をなしていた。クニヤージは、このドルジナー(註6)を離れて、政治的に存在し得なかつたのである。兩者は主従關係によつて結ばれた。しかし封土は存在していない(註7)。クニヤージとドルジナーの關係は、封土を媒介としない主従關係であつた。

しかし大土地所有者は、クニヤージのみではない。既述したが、奴隸所有者すなわちバヤーリンの下にも、土地所有が現われた。バヤーリンは、クニヤージと同様、奴隸主的農業經營者に轉化してきたのである。彼等の經濟的基礎も、貢納から奴隸制的收取に移行してきた。ここに、封土を媒介としない主従關係は薄らぎ、クニヤージの背後にかくれていたバヤーリンが、自立的な世襲的大土地所有者、奴隸主的權力者として、前面に現われてきた(註8)。

一〇九七年のリュベチ(Любеч)の會談(註9)に基づいて、スズダリの地は獨立のヴロスティ(Волость)(註10)と承認され、ウラヂミール・モノマフ(Владимир Мономах 1113—1125)が、これを領有した。彼はウラヂミール(Владимир)の町を建設し、クニヤージ權力の基礎を強化した。しかし同時に、世襲的土地所有者であるバヤーリンとの抗争が續けられてゐる(註11)。

そして、ウラヂミールの後繼者ユリ・ドルゴルキイ(Юрий Долгорукий 1154—1157)の子、マンダレイ・ゴウリュヴスキイ(Андрей Боголюбский 1169—1175)は、ルスの最強のクニヤージとなつた。彼は、南方のキーエフ地方のクニヤージにも、その威信を及ぼした。スズダリの地が、キーエフに代つて、政治的經濟的の中心地的意義を、獲得してきたのである。

このようなスズダリの向上に並行して、南方から多數の移住が、現われ、安住の地をここに求めて植民してゐる(註12)。彼等は、ポロビツツ人の侵入に追われたのである。植民による原野の開墾と共に、また土地の世襲化が、支配階級—奴隸によつて進められた。ここで、土地所有の具體的な形態、すなわち御料地、ボヤール有地、黒土について述べてみよう。

御料地(Дворовые земли)は、クニヤージの世襲的の所有地である。御料地の耕作者は、奴隸である(註13)。

ボヤール有地(Боярские земли)は、御料地以外のヴオチナ(вотчина)——世襲地——を指す。世襲地所有者は、主としてバヤーリン、教會及び大商人である。發生的には、ヴオチナは御料地となんら異ならない。しかし、ヴオチナ

所有者は、最初奴隸制的にヴォチナを經營していたが、やがて小作制的經營に移行した。この點は後に述べよう。

最後に黒土 (черные земли) である。黒土の最高所有者は、クニヤージであり、その耕作者は、共同體的農民 (креп-ьяне) である。彼等はクニヤージに對して、オプログ (оброк) の義務を負つた。

土地所有觀念の發生以前、黒土はクニヤージにとつて、ヴロスティ、あるいはナヂェルシイ (надежны) であつた (註14)。しかし、御料地所有者として現われてきたクニヤージは、まもなく自己のヴロスティを世襲的私有財産化してきた。ヴロスティは、ウヂェル (удел) —— 領有地 —— となつたのである。従つて、オプログは小作料的性格をもつてきた (註15)。たとえ、黒土農民がオーチナ (отчина) —— 父の地 (註16) —— を、耕作し續けたにせよ、領有者としてのクニヤージ —— 領主の出現は、小作制的收取の生成を考えねばならぬ。

しかし、黒土の小作制的收取形態は、ポヤール有地に現われてきた小作制的收取形態と、同一に考えることは出来ない。すなわち、領主がその奴隸主的權力をもつて、古代的な共同體的農民層を、奴隸制的に解體し、そこに奴隸制を普遍化して行く。このことが不可能なところに、黒土の小作制が現われたのである。言わば、共同的遺制に對する奴隸制の妥協が、それを生み出したのである。従つて、それは、奴隸主的權力に規定されている故に、奴隸制的小作制と言えよう。

しかしながら、ポヤール有地の小作制 (この收取の廣範な普及は後述する) は、奴隸制的を解消し、その結果に現われた收取形態である。奴隸制的小作制と封建的小作制の併存は、又兩者に高低のあることから説明される (註17)。

一二世紀特に一三世紀以降、既述した土地所有形態の二つの範疇に入る土地收奪、すなわち御料地有化、ポヤール有化が普及している (註18)。土地收奪のこの段階 (收奪する土地が、必ずしも共同體的農民の占有地でない、例えば開墾による自由な土地占取の段階) では、クニヤージ及びバヤーン相互には、比較的平靜な状態が保たれていた。すなわち、自足的自然經濟に規定されて、奴隸主的權力者クニヤージおよびバヤーンは、封鎖的孤立的性格をそなえた。地域的な奴隸主的支

配権力が認められる。

しかし、極めて緩慢ではあるが、貨幣經濟の發達（註19）は、世襲地的自然經濟の根底を揺り動かした。領主——大世襲地所有者は、奴隸主的收取を推進めて、經濟のこの發展に對應した。同時に土地の狹隘、共同體的農民層からの抵抗が、徐々に現われてきた。従つて、奴隸主的權力——領主權力の強化が、要請されてくる。まず領主とバイーリンとの臣下的隸屬關係が、緊密化してきた。しかし、領主の奴隸制を促進した經濟的要因に對して、バイーリンはより敏感であつた。一般に、バイーリンの世襲地、奴隸主的經營の規模は、御料地に比して遙かに小さい。そこでバイーリンは、自らの經營を放棄して小作制に依存し、より多く收取することによつて、貨幣經濟の發達に對應した。すなわち、バイーリンは、領主と異なる對應の仕方を示している。

しかし、復活した主從關係は、キーエフ・ルーシのそれと相違する。領主がバイーリンの奉仕の代償を、土地以外の領主財産に、求めることは困難である。ここに、新たな主從關係は、封土を媒介としてきたのである（註20）。

従つて、領有地、黒土は、領主の奴隸の貫徹と同時に、それと並行して、バイーリンによる小作制的解消の對象となつた。とはいえ、黒土の小作制的解消は、バイーリン——小作制的土地所有者の、主體的な運動として現われていない。それは被奴隸主的收取階級、すなわち奴隸及び黒土農民の抗争が、生み出したのである。要するに奴隸主的權力——領主權力の強化が、それを惹起したのである。

しかし領主は、自らの要求に基いて、黒土の小作制的解消を是認しなければならない。かくして領主の關心は、他の領有地に注がれてくる。このようにして奴隸主的權力、すなわち領主權力は、排他性をそなえてきた。所謂、封建的闘争が、この段階において普遍的現象となつている（註21）。次ぎにこの封建的闘争に觸れてみよう。

一三世紀以降、スズグリ・ルーシの諸領主は、タートル汗（Татарский Хан）の支配下におかれた。従つて封建的闘争

を述べるに先立ち、次ぎの諸點が指摘されなければならない。まずタールの征服が、スズグリ・ルーシの政治體制に手を加えなかつたことである。汗は既存の支配關係を承認し、無用な混亂を避けた。征服地にどのような支配關係、收取關係があるかではなく、いかにして征服の實を収め得るかが、汗にとつては大きな問題であつた。従つて、汗は領主勢力の伸長を防止するため二つの方法をとつた。それは血税(註22)と次ぎに述べる封建的鬭争の助長である。すなわち、汗は大侯の稱號を利用した。大侯の稱號が、ヤリーク(Ярик)(註23)によつて、いずれかの領主に與えられたのである。

スズグリの大侯、ヤロスラフ・ヴゼヴォドヴィツ(Ярослав Всеволодович)は、汗のバチイ(Батый)に、臣下の忠誠の宣誓をなし、タール征服後最初の大侯として承認された。次いで一二四六年この地位は、ノーヴゴロド領からスズグリ領主になつた(註24)。彼の弟、アレクサンドル・ネヴスキイ(Александр Невский)に與えられた。その後一二六三年にはトヴェル(Тверь)の領主ヤロスラフ(Ярослав)が、一二七二年には、コストロマー(Кострома)の領主ヴァシリ(Василий)が大侯の稱號を獲得した。このように大侯たり得る領主は次ぎ次ぎに變り、その稱號は一二三六年トヴェル領主アレキサンドル(Александр)から、モスクワ領主に移つた。すなわち、スズグリ・ルーシの封建的鬭争は、大侯の地位をめぐる極めて尖銳的に展開している。

以上要するに、スズグリ・ルーシの發展に二つの段階を指摘した。封建的自然經濟の下における奴隸制的收取形態の段階と、自然經濟の崩壞過程における奴隸制的收取形態の段階とである。従つて、これを支配權力形態からみれば、孤立的分權的段階と封建的分權的段階である。

従つて、スズグリ・ルーシの國家形態は、封建的分權的國家形態と結論し得る。

以上において、國家形態の發展を述べたが、その手掛りとして、經濟的發展に對應する小作制的收取の現われたことを指摘した。この點から明らかなように、黒土の小作制的解消に、必然性が認められる。従つてスズグリ・ルーシ以降の發展に

は、小作制的土地所有者が、前面に現われてくる。彼等は、封建的闘争、すなわち領主権の強化を通じて階級的に成長した。ここに黒土の小作制的解消が、彼等の主體的な運動として現われてくるのである。同時に、この運動の不可避的推進力として、換言すると、小作制的土地所有者の求心化の據點として、それに應しい領主権力が優越してくる。すなわち、國家形態の封建的分權的形態から、封建的集權的形態への發展が現われるのである。次にこの發展を論じることにしてしよう。

(註1) B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 163—164. Рязанщина, 前掲書、四五、一〇〇頁。

(註2) ヴァリヤークの出現以前、オグニシチアーニエ (Орпчанье) と言う特權階級が、スラヴ社會に見出される、オグニシチアーニエ (Орпчанье) とは奴隷所有者である。これら奴隷は、一般に、異部族相互の闘争による捕虜、及びその子孫であつた。オグニシチアーニエ階級の經濟的基礎は、奴隷所有と土地所有にあつたようである。従つて、本論に言及する外來的兵商階級の、土地所有者、奴隷主的經營者への轉化は、オグニシチアーニエ階級との同化である。しかし、後者の前者への轉化は比較的早い、前者の後者への轉化は、遙か後の時代、すなわち一一世紀以降である。これ以前には、奴隷は、生産用具——ホロービイよりはむしろ商品——チェラージイとしてより高價であつた。従つて奴隷制的經營は、未だ廣範に普及するに至らなかつたのである (J. Mayor, op. cit. vol. I pp. 17—18. : B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 164—165. Рязанщина, 前掲書、五四—五五頁)。

(註3) B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 283.

(註4) Рязанщина, 前掲書、一一〇頁。

(註5) バヤリリンとは、親兵隊の上層部を指すのであるが (三七頁、註6参照)、土地所有の發生以後は、一般にクニヤージ以外の世襲地所有者 (вотчинник) を意味する。従つて、本來のバヤリリン以外に、廣く僧侶、大商人がこれに包含される。

(註6) 親兵隊は、クニヤージと共にこの國土に現われている。彼等は、ほとんど非スラヴ人、すなわちヴァリヤーク人から構成された。親兵隊には二つの階層がある。上層部は、ボヤール (Bojar) / タニヤージ・ムーシ (Князья и мурзы) / 下層部は、ヂェトスキイ (Детский) あるいはオチロキイ (Опочка) と呼ばれた (B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 162)。

(註7) 親兵隊は、クニヤージと共に巡回して、徴収した貢納で衣食した (二九頁、註25参照)。「この年 (九四七年) 親兵隊がイーゴリ (キーエフのクニヤージ) に言つた、『スヴェネリドのオトロキイは武器と着物を身につけてゐるが、我等は裸體である。侯よ、貢物を取りに行かう。汝も得るし、また我等も得るであらう』と。彼等にイーゴリは聽從して、……」(ロシア年代記、三五頁)。

(註8) 世襲地もまた、クニヤージがその最高の所有權をもつた。しかしその所有權は、全く名目的なものである。本論で述べたが、世

製地の成立は奴隸労働に基くものであつた。クニヤージが、ウロステイの所有者、すなわち領主として現われた時には、既に多數の世襲地が、その領有地の内にあつたのである。従つて、バヤーリンの奉仕は、世襲地所有と無關係に考えられた。バヤーリンは特權的な、すなわち獨立的な奴隸主的權力者に轉化したのである (J. Mayor, op. cit. vol. I, pp. 23—25.; B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 375—376.)。

(註 6) 一〇五四年ヤロスラン (Ярослав) の死後、彼の領土は三分割された。すなわち、長子のイジャスラン (Изяслав) は、キーエフ、ノーフゴロドを、次子のスビャトスラン (Святослав) は、チェルニゴフを、第三子のウセウオロド (Всеволод) は、ペレヤスラウ (Переяслав) を與られた。本来、これらの領土は、永久的に相續を許されたものではなかつた。すなわち領土は、侯家に屬するものであつた。年長者相續の順位に基いて後繼者はクニヤージの地位を繼承する。従つてクニヤージは領土を、一時的に保有するに過ぎない。この様な一時的保有を本質とする領土が、ウロステイあるいは、ナデルキイと呼ばれた。前述したがウロステイの繼承は、年長順位によつて決定される。従つて、前述のイジャスラの死後、彼の保有した大侯の地位、及びウロステイを、弟のスビャトスラフが獲得し、又、スビャトスラフのウロステイであつた、チェルニゴフは、その弟のウセウオロドが繼承すべきであつた。すなわち、彼等は “climb up as on a ladder” すなわちあがった (S. Platonov, op. cit. p. 47.)。しかし、一〇九七年の會談は、各自がそれぞれの父地 (отчина) を相續することを決議した。すなわち、スウヤトゴルク (Святослав) ——イジャスランの子が、キーエフを、オレーグ (Олег) ——スビャトスラフの子が、チェルニゴフを、モノマン (Мономах) ——ウウオロドの子が、ペレヤスラウのウロステイを、それぞれ繼承した。このような父地の繼承が發展して、ウロステイはウヂヘル ——領有地となつたのである。一三—一四世紀にはウヂヘルとしての明確な形態が現わはつてゐる (J. Mayor, op. cit. p. 23.; S. Platonov, op. cit. pp. 46—49.; B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 182—185. ロシヤ年代記、一八四—一八五頁)。

(註 10) 三八頁、註 9 参照。

(註 11) 一例を挙げると、モノマンの子、アンドレイ (Андрей) は、バヤーリンにより、一一七四年この地で殺害されはつてゐる (ロシヤ年代記、四五三—四六一頁)。

(註 12) S. Platonov, op. cit. pp. 66—67.; B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 295—297.

(註 13) 強制労働に服する奴隸 (сириники) の外に、普通農民 (крестьяне) がある。彼等は土地用益の代償として、イズデヒリイニ (издежили) ——十分の一税 ——を支拂ひた。穀物、乾草、魚類の自然物が、これにあははつてゐる (J. Mayor, op. cit. vol. I, p. 24.; B. Ключевский, Указ. соч. ч. I, стр. 374—375.)。

(註14) 三八頁、註9參照。

(註15) “The ‘black’ lands were rented by the prince, or were given ‘on okrok’—that is, for a fixed payment—to individual peasants or to whole peasants’ communities. (J. Mavor, op. cit. vol. I, p. 24.)

(註16) 一四・五世紀頃まで、黒土農民は自己の耕作地を、祖父の地、父の地と呼んでゐる。彼等自身もまた、比較的、非隷屬的、獨立の性質を持ち續けていた(リヤシチェンコ、前掲書、一〇八頁)。

(註17) ノーヴゴロド地方では、世襲地の耕作者が、ポロウニーク(половники)と呼ばれてゐる。この言葉は、ポロウニツァ(половица)——半分——から派生したものである。すなわち、ポロウニチェンストヴォ(половичество)——收益の半分を地主に納めることから明らかたように、收获の二分の一乃至三分の一が、小作料として收取された(J. Mavor, op. cit. vol. I, p. 29. ; B. Ключевский, Указ. соч. ч. I. стр. 85—86)。これに反して、黒土農民、特に御料地の自由農民の小作料は、インヂェリイ(издеи)——すなわち十分の一である(B. Ключевский, там же. ч. I. стр. 374—375)。尙、リヤシチェンコは、奴隸制から小作制への移行が、世襲地が分散している場合、既に一二・三世紀に現われたと指摘する(リヤシチェンコ、前掲書、一二〇、一二九—一二三〇頁)。

(註18) リヤシチェンコ、同書、一一〇頁。

(註19) 「都市の商工業的意義は、特に一二—四世紀には極めて、微弱な未熟な、形態において現われたにすぎない……」。しかし、「一五世紀以降には、既に、奴隸主的大土地所有者が、市場において組織的に活動してゐる」(リヤシチェンコ、前掲書、一四六—一七三頁)。

(註20) 第三章、參照。

(註21) 一四世紀初頭には、四つの大きな領有地が認められる。モスクワ(Москва)、トウヘル(Тверь)、リヤザン(Рязань)、リニツキー・ノーヴゴロド(Нижегний Новгород)の諸領有地である。

(註22) 諸領主は軍事的義務を課せられた。すなわち、自己の軍隊を汗の下に派遣する。時には領主自身が派遣軍の指揮者として、汗の外征に参加することを命ぜられた(A. Rambaud, op. cit. vol. I, p. 125)。

(註23) 第三章、註參照。

(註24) 弟であるネウスキイがスズダリ領主を繼承したことは、古い年長順位(очередной порядок)相續制が尙殘存してゐることを示してゐる。

(以下次號)

正 誤 表

(頁・行)	(誤)	(正)	
一八・一	Славянское	Славянское	
一八・二	Восточныи	Восточныйи	
一九・一六	Pokrovsky, translated by D. S. Mirsky Brief H.—	Pokrovsky, Brief History of Russia, translated by D. S. Mirsky (P—	
二五・三	(Фр слав)	(Русслав)	
二六・二	краи	краи	
二九・四	語の könings スラヴ語	語 könings のスラヴ語	
三一・一六	所有であるから」(Про	所有であるから」(Про	
三六・八	になつた (註24)。	になつた (註24)。	
三九・一六	トヴェユル	トヴェユル	